

性とその扱い方を提示しているとみてよいのではなかろうか。今後における一つの研究方法を示す著作として一読をお薦めしたい。

(松村祝男)

新修名古屋市史第三専門部会編：

『新修名古屋市史報告書 4 江戸期なごやアトラス—絵図・分布図からの発想—』

名古屋市総務局 1998年9月

A4版 77ページ 2,380円(税込)

歴史地図が力を発揮する場合には、幾つかの種類があるらしい。都市プランや海岸線の位置を復原するものであれば、位置比定そのものが一つの学説を表す場合がある。それに対して本書の魅力は、広域を対象とした地誌をデータベースとして扱い、それをそのまま地図化することによって、データそのものに語らせる分布図を示したところにある。そのような処理に耐える地誌は、近世においても決して多くはない。また原史料にあたっての膨大な情報量の処理は、かなりの労力を要求する。本書は、さらにその上に、近世期の歴史地図としては他に類を見ない様々な主題が取り上げられており、一図ごとに読者の興味がかきたえられるものとなっている。

本書の編者は、新修名古屋市史の近世前期を担当する部会である。したがって本書は、現在刊行中の名古屋市史編纂の過程から生まれた歴史アトラスであるが¹⁾、実際に112に及ぶ図の作成とその解説を執筆したのは、執筆委員である名古屋大学文学部地理学教室の溝口常俊教授、ならびに山元貴継・高井寿文・村田祐介・野広哲史の諸氏であり、分布図ソフト「マンダラ」は谷謙二氏によって開発された。また、本アトラスの構想は、すでに溝口教授によって人文地理学会特別研究発表においても披露されており²⁾、その場では、本書には必ずしも明示されなかった方法論的な関心についても議論が行われている。以下、本書を紹介するにあたっては、その点についても言及したい。

さて、本書で最も活用された史料は、二つの著名な地誌、『寛文村々覚書』(1672)と『尾張徇行記』(1822)である。ともに、史料として従来個々に参照されてきたものであるが、尾張一国の村ごとの諸データが17世紀と19世紀の二度にわたって残されているという幸運な状況は、これまで十分には活かされてはこなかった。その理由としては、データベース作成と製図作業の煩雑さもさること

ながら、歴史地理学者にとっても、往々にして地誌史料とは特定の村や特定の項目のデータのみを選択的に利用するものであって、地誌史料全体を総合的に分析するという手法がこれまで余り試されてこなかったためだ、と言わなくてはならない³⁾。溝口教授が発表時に掲げた「近世尾張の地域構造」というテーマは、歴史地理学者にとって魅力的なテーマの一つであるが、その追求にあたって特定の行政文書や村文書、あるいは商人文書から個別のデータを蓄積する手法を取るのではなく、地誌史料をデータベースとして扱う方法からどのような議論が導かれるのかは、手法や方法論の議論としてみるときに、大変刺激的なものとなる。

史料の操作に関して、溝口教授は、刊本に含まれる数値の誤りを回避すべく、原本との照合を行うという正攻法を取った上で、両史料をデータベース化している。その上で、データを図化するために、『尾張国町村絵図』(1841)、『尾張志』に付せられた郡図(1830-44)ならびに地籍図(1884)によって村境を確定し、これをベースマップとしている。ただし地誌史料では、名古屋城下のデータが村ごとのデータと比較できるようには示されていないため、作製された図の多くでは名古屋城下部分が空白として残されている。そのため本書には都市名古屋のアトラスという性格は薄く、現代風にいえば名古屋都市圏もしくは尾張中部アトラスとしての性格が強いことに注意しておきたい。

次に内容に関して、まずI章「自然と環境」では、1「集落」において村落と地形が概観された上で、2「土地利用」で田畑はもちろんとして、山林や草地、新田、見取場のデータが図化されている。ここでは水田の卓越が確認されながらも、水田以外の土地利用にも注意が注がれている。

II章「社会と経済」では、1「領地・支配」において尾張藩の直轄地と相給村の分布が確認された上で、2「人口と石高」では人口と戸数、世帯員数の増減、性比のデータが示され、歴史人口学的分析の一端が開示されている。とりわけ、近世を通じた核家族化の進行や、名古屋近郊にのみ特みにみられる人口減少の状況が鮮やかに図化されている。続いて、一人当たり石高や反当たり石高、無高の分布、および牛馬の分布が示される。馬文化圏に属す名古屋では牛頭数は微々たるものにすぎないが、近世期の馬頭数は減少していたといったことも表現されている。

次に、3「産物と商品流通」では尾張全図が掲

げられた上で、商人文書からは把握しにくい物資の移動が復原されており、地誌史料における産物データの分析が威力を発揮した例として読むことができる。ここでは商品として注目されがちな綿や繭、陶器、酒だけでなく、藺草、灰、糞尿、野菜の動きが検出され、都市近郊での野菜の各品種の産地形成までが示されている。また年貢米の運搬手段についての一図は、知多半島ならびに木曾川・伊勢湾沿岸諸村において、舟の使用が卓越していたことを明示している。

4「交通」では、街道の位置関係が概観された上で、まず河川・用排水路と交差する橋の分布が、『東海道分間延絵図』・『美濃路分間延絵図』を援用して検討されている。結果として、石橋は名古屋城下に、板橋は西部、土橋は東部に、分布の違いが対照的であったことが示される。次に、宿場と助郷圏の分布が示され、そして『寛文村々覚書』において各村の最寄りの町村として挙げられた集落が検討されている。これは、宿場町が周辺の村落より最寄りの町村として記載されるもので、本書では「ターミナル」あるいは中心地として位置づけられている。それぞれの「ターミナル」は勢力圏をもつが、より大きな「ターミナル」を挟んで向こう側の村々からは「ターミナル」として指名されることはなく、中心地の高次・低次が認識されていたことを窺わせている。

続いてIII章「文化と景観」では、1「都市景観」と2「村落景観」においていったん地誌史料から離れ、『尾張国町村絵図』、徳川林政史研究所蔵村絵図、地籍図、迅速図(1891)を用いて、名古屋城下町、上志段味村、末森村、平針村、旧富田荘の村々の景観が復原される。また3「雨水と用水」では、再び地誌史料に拠りつつ溜池と井堰分布の地域差が示されている。

次の4「村の評価」は2つの認識上のデータを扱う。一つは各村から名古屋までの距離であり、交通事情によって実際の直線距離よりも大きく見積もっていた村と小さく見積もっていた村が、併存していたことが浮かび上がる。もう一つは『尾張徇行記』の著者樋口好古による各村に対する「村立」の四段階評価である。ここでは好古が、戸口・石高が大きく、竹木が豊かな村ほど「村立ヨシ」と評価していたことが明らかにされている。

5「宗教」では、仏教各宗派の寺院分布、神社の祭神別分布が示される。7つの宗派・10の祭神ごとに図化されているため、分布に特定の偏りが

有るものと無いものが併存していたことが明瞭であり、興味をひく。続く6「観光名所」では、『尾張名所図会』の示す名所の分布が図化されている。寺院・神社が圧倒的に多いものの、それ以外に比較的多い項目を挙げれば、故事、塚・古墳・墓、町屋・風景、村・風景、祭り・行事が検出される。ここからは、近世尾張人の旧跡に対する歴史意識⁴⁾や風景観を見て取ることができる。

最後の節となる7「日記の中の名古屋」は、著名な『鸚鵡籠中記』(1684-1717)を取り上げ、名古屋城下における火事の分布ならびに自殺・心中の分布を示す。後者は、ほとんど図化されることのない主題と思われるが、水と関わりのある場所あるいは寺門前が選ばれた事例が目につくという。

以上、さまざまなテーマにわたる図を収めた本書は、その所収図の多さばかりでなく、作製されたテーマの選定においても、一般の読者をひきつけるものを持っている。また要所要所には現在の景観を示す写真や『尾張名所図会』の挿図が配置され、図が指し示す諸現象について想像力を伸ばす一助となっている。もっとも、それぞれの図に付された解説は、各主題の研究史を解説することまでは意図されていない。溝口教授が発表時に示したG・W・スキナーのコア・ペリフェリ・モデルとの関わりや、速水融に代表される歴史人口学との関わりは、一後進として最も興味をもつ点であるが、より突っ込んだ議論は、頁数の限られた本書においてでなく、別の機会になされるものと期待したい。また、言うまでもないことだが、本書は名古屋域に限定したアトラスであり、データベース化された地誌史料が示す情報の一部分を示したものでしかない。機会があれば、尾張一国の本格的歴史アトラスとして拡充できないものだろうかと、思わずにいられない。

(米家泰作)

〔注〕

- 1) 新修名古屋市史編集委員会(1999)：『新修名古屋市史第三巻』、名古屋市、924頁。
- 2) 溝口常俊(1996)：『近世尾張の地域構造、人文地理』、48-1、98-101頁。
- 3) 小山修三・松山利夫・秋道智彌・藤野淑子・杉田繁治(1982)：『斐太後風土記』による食料資源の計量的研究、国立民族学博物館研究報告、6-3、363-596頁。
- 4) 羽賀祥二(1998)：『史蹟論—19世紀日本の地

域社会と歴史意識一』、名古屋大学出版会、415頁。

金沢市史編さん委員会編：『金沢市史資料編18 絵図・地図』

金沢市 1999年3月 本文(含む絵図・地図48枚)136頁 別刷絵図・地図26枚 7,000円
周知のように金沢には、矢守一彦らの研究によって貴重かつ重要な絵図が多数あることは広く知られていたが、大型のものが多いために一般の目に触れることはあまりなかった。それが、『金沢市史』の絵図・地図編によって、74点にも及ぶ美しい絵図が手軽に見られるようになったという朗報が届いた。金沢から送られてきた本書を開くと、加賀国絵図や金沢城下町絵図などが26点も大きく別刷にされており、期待通りの魅力と迫力に圧倒された。また、これだけ多くの貴重な絵図を鮮明な写真で収録しながら安価な点にも驚いた。まずは、日本有数の絵図の宝庫を開かれた金沢市史の関係者の英断と努力に対し、敬意を表したい。

さて、本書の構成は、総説に始まり、1 国絵図、2 郡図、3 城下町図、4 金沢城図、5 町並み図、6 寺社・屋敷図、7 城下周辺図、8 河川・用水図、9 街道・道中図、10 近代以降の金沢図と分類し、それぞれを編年配列して最後に掲載絵図・地図の一覧を載せている。

1は、加賀国の幕府撰の江戸初期図をはじめ正保と元禄図、藩撰の延宝図、加賀藩を代表する測量家の石黒信由が作成した加賀四郡組分絵図と加越能三州郡分略絵図、その孫信之の細密絵図である。また、これらの図形を比較した図は、精度が良くなる過程を一目で理解できる。

2は、有沢武貞が写させた賀州河北郡図籍と同石川郡図籍、石黒信由の同郡分間絵図と同郡村々組分図である。金沢城下町の位置する石川郡の3種の図を比較できるのは興味深い。1の国絵図との関係も探ってみたいと思った。

3～6は、金沢城下町に関連するものである。これらは、26枚も掲載され全体の3分の1を占め、別刷の半分にあたる13枚が割かれている。金沢の象徴とも言うべき城下図の収集と資料化にいかにも多くの力が注がれたかがわかる。記載内容もほとんど読むことができ、資料的価値も高い。これらの図を携えて金沢城下町をじっくりと歩きたいと思うのは、私ばかりではあるまい。

3は、現在最古の金沢図をはじめ、それに続く

加賀国金沢之絵図、ついで藩用図の中で最大の金沢城下図は見応えのある別刷2枚となっている。また、主題図としては、宝暦大火の被害を描いた金沢大火消失域図、町屋のみを描いた金沢町惣絵図がある。測量図では、石黒の金沢町図、遠藤高環や有沢武貞の6枚の城下図がみられる。この他に、明治3年の木版図、城下の氏子域を示した図、幕末の木版図と多彩で、最も楽しく鑑賞できた。

4は、新発見の最古とされる慶長期の東大図と、これまで慶長図とされた京大本とその系統本がある。また、正保、寛文、宝暦火災前、寛政、文政の各城図が収められる。さらに、二の丸・松・金谷・竹沢・越後の各御殿図もある。これらは、6の寺社・屋敷図とともに建築図面が多く、金沢市史には建築編も発刊されるので、そちらに収録した方がよい図もあつたのではなからうか。

5は、南町・上堤、宝船寺、川南、三俣・六斗林・地黄煎の各町絵図と、金沢城下の屏風として享保、天保期、江戸後期の3点を掲載している。

周知のように城下町絵図は、武家屋敷は詳細に描かれるが、町人地は地割すら描かないものが少なくない。従って、各町絵図は貴重であるから、一部ではなく読み取れるように大きく掲載して欲しかった。また、美しい屏風は、城下町絵図にない立体的な金沢町の様子を伺わせてくれる。

ところで、これらの金沢城下町絵図の系統分類図が付されているが、これについての解説がみられないのは残念であった。

6は、加賀八家の一つ前田美作邸図、河野久太郎の作成した御屋敷并御家中毛受之図、前田家菩提寺の天徳院と桃雲寺の図、藩の施設である公事場、御算用場、町会所の図がみられる。

7は、城下町の港町兼在郷町である宮腰、粟崎、大野の絵図、石川郡海岸の水深を示した図、金石港や新田開発に関する図が載せられている。城下周辺の状況が国絵図や郡図によってしか伺えない本書にとって、これらの図は貴重である。

8は、河川図として犀川と大野川の航路や治水図、用水図が辰巳と寺津用水図を収める。金沢城下町絵図と比較すれば、金沢の河川の恵みを感じ取ることができるであろう。

9は、江戸と金沢間を描いた北国海道絵図、従加州金沢至江戸下通山川駅路之図、刊行図の駅路旅鈴、賀武達道路図、金沢江戸道中図、金沢と京都間の街道を描いた賀州至京師両道置郵図、さら